

# 原発はモラルに反している

鎌田 慧 ルポライター

## 1 —— なぜ原発に反対するか

原発に関して問題になっているのは、もちろん今度の事故のような危険性のこともあります。私自身も、『ガラスの檻の中で』<sup>1)</sup>という本を70年代に出してしまっていて、その中で「見えない放射能があなたを確実に襲う」ということも書いています。それはほとんどの原発反対派の人が見ていた未来像だったわけで、それを指摘しているながら、誰も止めることができなかった。どうして止められなかったのかという問題について、『週刊金曜日』に「わが内なる原発体制」<sup>2)</sup>という文章を書いています。結局、反対とは言いながら、その体制を支えてきてしまったんではないか、そういう思いで書いた文章です。

原発に反対している理由として、もうひとつ、他の人たちがあまり指摘しないことがあります。私自身が原発地帯を何度も回って、地域の人たちの話を聞いて出した結論は、原発の存在自体がモラルに反しているっていうことです。つまり、どんなにいやだと言っても、カネだけで説得してきたということです。「迷惑施設」とよくいいますが、それは言葉の使い方で、本来は「危険施設」なんです。危険を強制していくのが、カネによる「説得」ということです。

たとえば、青森県のむつ市にいま使用済み核燃料の中間貯蔵施設が建設中です。工事の事故で建設自体は止まっています。実は、むつ市の市役所はかつてのダイエーの店舗を使っています。市役所ってのはふつう、5階とか10階とか高さがあって、地域の住民を睥睨するわけですけど、むつ市の市役所は、平たい、カニが謝っているみたいな建物です。ダイエーが、下北半島の中心地だからということでもつ市に進出したんですが、計算違いで撤退しました。それを東京電力が全部

1) 鎌田慧『ガラスの檻の中で——原発・コンピューターの見えざる支配』国際商業出版、1977年。

2) 鎌田慧「わが内なる原発体制」『週刊金曜日』臨時増刊号、2011年4月26日。

一括して18億円を支払って、いま市役所の庁舎になったんですね。福島のJヴィレッジは160億円で買い与えました。

欲しいものはなんでもカネで与える、それによって原発を推し進める。自治体も、何でもいいから要求する。以前は、寺院を作ってくれって話もあつたりしました。打ち出の小槌みたいな感じです。そういうことを許してきているんですね。電力会社はコストを電気料金に計上すると何の痛痒もない、株主の利益もちゃんと配当で出る。そして、地域独占ですから、競争相手がいない。これを許してきたんですね。

それから、かつての通産省、現在の経済産業省が日本の原発を一貫して進めてきた原子力行政のメッカですけど、その中に原子力安全・保安院という、原発の安全をチェックする機関があるわけです。私は、ピッチャーとキャッチャーが一緒だっていうふうに言ってきましたけど。このあいだ汚職のでっち上げで落とされた、元福島県知事の佐藤栄佐久さんは、犯罪者が警官をやってるみたいなもんだと言っています。私よりも強烈だと思いますが、原発に反対していて汚職をでっち上げられ、逮捕されたという恨みがありますから、もっと激しい言い方です。

## 2——フィクションとしての原発

どうしてそういうことが全部まかり通ってきたかということ、原発自体がフィクショナルな存在だからなんですね。安全だと言わないと進まないわけです。ところが、原発は危険なんです。危険なものを安全と言わなきゃいけない。でも、これまでもいろんな労働者が、原子炉はものすごく入り組んでいるから、地震の振動でパイプが切断されるってことを昔から言っているし、何十キロメートルにわたっているパイプを、下請けの孫請けで作るわけですから、どうしても手抜き工事になるんですね。でも他に業者がいない。完璧にやることは、コストを計算する民間企業では無理なんです。

よく「安全神話」と言っていますけど、安全「信仰」なんですね。宗教なんです。原発は。絶対安全だという宗教で、何があってもそれでつなごうというもの。国が、電源三法という、地域が原発を引き受ければカネを払うというしくみを作ってきた。原発が稼動してから交付金を払うのではなく、用地を決めるともうお金を払います。稼動10年前くらいから、450億円ずつ払います。10年間ですから、4,500億円先に払って、稼動しはじめると、さらに450億円。10年間で支払う。交付金がなくなってしまって、さらにこんどは固定資産税が毎年減っていく。それまでの間、原発を誘致した首長は、自分の政治力を誇示するために、地域に見合わないようなでっかい体育館や公民館などのハコモノを作るんですが、それを維持できなくなっちゃうんですね。それで、もう一基原子炉を作ってくれ、もう一

基作ってくれっていう形になる。福島第一原発も、震災前は7号機、8号機を誘致していました。

原発周辺というのは、私に言わせれば、「裏切り地帯」なんです。反対していた人がどんどん賛成に変わっていく。典型的な人は——あえて実名で書いているんですが——福島県の県会議員だった岩本忠夫さんという人です。この人には、彼が原発反対のころからずっと会っていました。なかなか人格者で私は尊敬していました。電力会社の妨害で選挙に落ちたこともあります。妨害と口で言うと簡単なんですけど、六ヶ所村だったら、村長選で一票3万円ぐらいでした。岩本さんはのちに福島第一原発のある双葉町の町長になりますけど、100%転向して増設要求をするようになりましたね。町の財政をどうするかってときに、やっぱり原発からカネを引き出すしかないという結論になったんだろうと思います。転向した後もお会いしたことがあるんですが、お嬢さん2人が東電の社員と結婚したということもファクターになったらしい。こういう、反対派の人で、息子を東京電力とか関西電力とかに就職で引き受けてもらってから、変わってしまった例は無数にあります。

### 3——被ばく労働は日本の労働構造を象徴している

それから、被ばく労働の問題です。防護服といっていますが、防護服がどれだけ防護するかよくわからないところがある。一生懸命シャワーで体をこすったりして落としているんでしょうけど、だいたい放射性物質の被ばくって蓄積していきますから。いま、原発労働者は、今度の原発事故を契機に年間250ミリシーベルトまでっていう被ばくの基準が出ていますが、以前は100ミリシーベルトでした。このとき、一般人は50ミリで労働者は100ミリでいいとなっていました。このときから僕は問題にしました。人間にいったいどういう種類があるのか。被ばくしていい人間と被ばくして悪い人間との差があるのか。原発で働くんだから被ばくしてもいいという論拠なんです。いまは非常時だからもっとそれも上げてもいいという、そういうふうになってきている。

これまで、被ばく労働で労災認定された人は十数人しかいません。いろんな裁判がありました。しかし、日雇い労働者ですから、ましていろんな地域を転々として回っているうちに被ばくした人たちですから、裁判闘争やれって言ったって、まず無理ですよ。お金もないし、バックアップする人もいないし、証明する資料もない。いろんな被ばく労働者が現れてこれから社会問題化するでしょうけど、それをどういう風にして国が認めていくのか。

福島第一原発が始まったころに、白血病とかガンとか小頭症とかが発生しているっていうんで、私も取材に行ったことがあるんですが、結局、病院に行くと、そういう患者はいるけど、因果関係を証明できない。いままできちんと調べてい

れば、地域の疫学的な統計上の差が現れるのかもしれませんが、昔の統計がない、ということで、なかなか疫学的に証明できないっていうんで、それっきりになってしまっていました。

被ばく労働は、日本の労働構造の集約的な象徴なんですね。元請けがあって下請けがあって孫請けがあってひ孫請け、「ひひ」孫請けがあって、8段階ぐらいになっている。事故当時は、1時間2万円ぐらいといわれていましたが、平常時は1日1万円ぐらいでしょう。元請けがいくら払って、いくらピンハネされたかはわからない。日本の資本主義が成立したころから、北九州八幡の官営製鉄所が始まったころから、本工と日雇い人夫の重層的な労働構造がずっとあったわけです。日本の資本主義を発展させてきた構造が、いまコンピューター社会、原発社会になって、むしろ拡大してきました。

こないだ、原発でお父さんが働く子どもが毎日新聞に投書して採用されたものが問題になりましたよね。電力会社だけが悪いのか、みんな悪いのではないか、都会に住んでいる人も電気使っているんじゃないのか、という批判です。

これはもう根本的にまちがっています。あくまでも、政府と電力会社の責任です。都市住民の責任じゃない。無関心であったという意味では責任はありますが。みんながいやだいやだと言ったのに、カネで押しつけてきた、そういう原子力行政なんです。私は、「原子力発電」ではなく、「金子力発電」だと呼んでいます。何も電気をつくるのに、原発使う必要ないんですね。そういう巨大な無駄を、これまでやってきたわけです。原爆のヒバクシャの犠牲をまだ処理できないうちに、またあらたな犠牲者をつくったことは、原発反対運動が弱かったからです。今度こそ、原発を止める。その運動が必要です。

[かまた さとし]